

先輩移住者の声

Case 1



職場のある広島市まで 新幹線でおよそ30分*。 週末を過ごす山口市は 二地域居住に最適な場所。

都会と田舎に住まいを持つ田中さんは、
いわゆる二地域居住を実践中。
そんな田中さんに山口市の印象と、
二地域居住のメリットを聞いてみました。

*新山口駅から広島駅までの最短所要時間

田中 浩二さん(59歳)

高校までを萩市で過ごす。県内各地(下関・徳山・柳井など)および東京での勤務を経て、現在の配属は広島に。
仕事のある平日は広島市、週末は山口市で生活する、二地域居住を実践中。奥様のご実家は山口市。



自然と人の温もりに包まれた 山口市での週末があるから 広島での仕事も頑張れる

二地域居住の決め手は 山口市の恵まれた環境

山口県萩市で生まれ育った田中さんは、高校卒業後に企業に就職。東京、下関、周南、などを経て、現在の勤務地は広島。そんな田中さんの暮らしは、山口市と広島市の単身生活、いわゆる二地域居住だ。仕事のある平日は広島市、週末は山口市で家族と過ごす。「新幹線なら新山口駅から広島駅まで約30分。気軽に行き来できるため、二地域居住に踏み切りました」と田中さん。これまでの各地での暮らしを思い返し、賑やかな都会はずっと暮らすには不向きだという結論にたどり着いた。もちろん、奥様のご実家が山口市というのも理由の一つ。山口市にも家を構えたいと相談したとき、奥様はすんなり受け入れてくれた。

「妻も山口市育ちです。山口市の豊かな自然、落ち着いた環境、何より住む人たちの温もりをお互いよく知っています」。

趣味に全力投球する週末が 日々の活力になっている

実際に二地域居住を送りながら、日々田中さんが感じているのは、山口市の暮らしには癒しがあり、リフレッシュにもなっているという事実。実は田中さん、週末はレノファ山口FC*のクラブ運営をサポートするボランティア組織「Team BONDS」の一員として活動しているのだ。各地へ応援に駆けつけたり、シーズンオフにはポスターを配布したりと大忙し。「2009年の観戦をきっかけに応援をはじめ、JFL入会を機に、Team BONDSに入りました」。一見、チームのため

だけに注ぐ週末のようだが、田中さん自身にとっても活力になっているという。「週末になるといろんな多くのサポーターさんに会える。馴染みの顔は増え、新しい出会いもある。山口市民の人柄の良さを肌で感じるひと時です」。週末の山口は、美しい緑や空気、そして、趣味の活動を通じて人々の温もりに包まれる充実した時間なのだ。

レノファ山口を通じて 山口市を活性化させたい

田中さんの目標は、老若男女問わず、レノファ山口の知名度を上げること。そして、地域一体となってチームを盛り上げることで、山口市がもっと活性化することを願う。「ぜひJ1に昇格してもらいたい。田舎だけじゃなくてもできる。維新の志士を多く輩出した山口ですから」と田中さんは笑顔で話す。何もなかったかのように平日は仕事に励む。そして週末はTeam BONDSのひとりとして全力疾走。「山口市は二地域居住にぴったりの場所です」。田中さんは、山口市での暮らしに支えられ、充実の日々を送る。



「レノファ山口で地域の活性化」という目標を胸に抱き、全力でサポートする田中さん。山口市だからこそ出会えた、唯一無二の生きがいが

*山口県全19市町をホームタウンとするJリーグ加盟のプロサッカークラブ。ホームスタジアムは山口市にある「維新みらいふスタジアム」。



仕事を引退し、将来を考えた永田さんは、思いきって湯田温泉の高齢者向け住宅に入居。そんな永田さんの日々の暮らしを輝かせる山口市の魅力について聞いてみました。

山口市での暮らしには、
住みやすい環境だけでなく、
心がふわりと温まる
人々とのふれあいがある。

永田 美智子 さん(82歳)

島根県津和野町で生まれ育った永田さんは、結婚を機に23歳で山口県岩国市へ。その後、ご主人の転勤に伴い山口市へ移住。以後、山口市で子育てや仕事に励み、現在は湯田温泉にあるサービス付き高齢者向け住宅で暮らす。

自然も食も歴史も豊かですが 山口市の魅力はやはり「人」

慣れない土地での不安も 人々の温もりが一掃した

島根県津和野町で23歳まで過ごした永田さんは、結婚を機に山口県岩国市へ。その後、ご主人の転勤で山口市湯田温泉に。移住当初、何より驚いたのは、自宅にお風呂がなかったこと。当時の湯田温泉では、どの家庭も共同温泉に通うのが当たり前だったそうだ。「でも、そのおかげで山口市のみなさんの温かさを知りました」と永田さん。小さな子どもを連れて、まだ子育てに不慣れな永田さんに



湯田温泉周辺をウォーキング。「共同温泉の湯はとてもきれいで、ここにいるのは素敵な人たちばかりなんだなって思いました」と当時を振り返ってくれた。

地域の方々がたくさんのアドバイスをくれ、手助けもしてくれた。「だんだんと温泉通いの習慣はなくなりましたが、心強いお知り合いがたくさんできたんですよ」。自然が豊かで穏やかなのはもちろん、温かい人々も山口市の魅力だと永田さんはいう。

大きな決断を支えたのも 親切な人たちとの出会い

永田さんは、長年大切に見守ってきた会社を8年前に引退。その後は湯田温泉を離れ、市内のマンションに引越し、ご主人が亡くなられてからは一人暮らしに。寂しさはあったものの、趣味の世界へ。しかし、だんだんと「元気なうちに身の回りのものを整理したい」と考えるようになり、現在の住まいに入居した。「いくつか見学しましたが、職員のみなさんがとても親切で、迷うことなく決めました」と永田さん。かつて住んでいた湯田温泉に戻ってきた形だ。そうはいっても今の生活になじむのは大変だったという。「特に大好きなお料理ができなくなったことがとて

もストレスでした」。そんな永田さんを変えたのは、日々交わされる職員さんや入居者さんたちとの会話、部屋での読書や手仕事、施設周辺でのウォーキングなど、自分なりに見つけていった楽しみだ。特に、子どもが小さい頃によく歩いていた湯田温泉でのウォーキングは今ではすっかり日課になっている。「『いってらっしゃい』、『お帰りなさい』の些細な会話に心がほっと緩みます」。お世話になった人たちに心から感謝し、現在の暮らしに満足されているご様子だ。

「おいでませ、山口」。 魅力を肌で感じてほしい

山口市への移住を考えている方にひと言をお願いすると、「ずばり、『おいでませ、山口』です。山口市は自然も食も歴史も豊か。何より、みなさんのお人柄が素晴らしい。本当に住みよいところですよ。一度来られたら、きっとこの素晴らしさがわかると思います」。山口市の人々の温もりを包まれ、今日も永田さんは穏やかな一日を過ごす。





山口市の暮らしは自分次第。
自然、食、地域の人々の温もり…
ちょっと行動してみるだけで
たくさんの魅力が見つかる。

ケアビクス普及指導員として
山口県内を生き生きと飛び回る平野さんに
山口市で充実の生活を送るための
ヒントを聞いてみました。

平野 さとみさん(57歳)

山梨県甲府市出身の平野さんは、24年前にご主人の仕事の都合で山口市へ移住。子育てがひと段落した後、15年間学習塾を経営したが、親の介護のため引退。現在は、介護に役立てるために学んだケアビクスの普及指導員として活躍中。



探せばいくらでも見つかるのが 山口市の魅力と日々の楽しみ方

移住の不安を和らげたのは 山口市の魅力の豊かな自然

山梨県甲府市出身の平野さんは、大学時代を東京で過ごしましたが、それ以外はずっと山梨。ご主人の仕事の都合で山口へ移住したときの不安について尋ねたら、「そりゃあもう！だって、お味噌とお醤油の味から違うんですよ」と正直に答えてくれた。「食も文化も全く違う、もちろん知り合いもない。でも、初めて小郡駅(当時)に降りたとき、空が広いなあって思ったんです」。山口市の豊かな自然が不安を和らげてくれたという。「野菜も魚もとにかくおいしかったり、初めて見る昆虫がいたり、海まで1時間だったり…」と、山口市の暮らしで平野さんを感動させたのもやはり自然だったそう。

自ら行動することで築いた 地域の方々とのつながり

移住した頃の、平野さんの

毎日を支えたのは、幼稚園の送迎やPTA活動の中でふれた地域のお母さん方の優しさだった。「みなさんとても親切で、本当に子育てしやすい環境。家庭菜園の野菜をいただいたり、タケノコ掘りに誘っていただいたり、おすそ分けの文化もまだあり、山口市は人間関係が豊かです」。子どもが小学生の頃は、お母さん友達と学校の図書室のボランティアをし、本の補強や修理に加え、図書室に行くきっかけを作るためのイベントも開催した。また、市やJAなどが主催する体験イベントにも積極的に参加。「田植えやスイカの収穫に子どもは大喜び。都会は抽選でなかなか参加できないので

すよ」。常に自ら行動することで、山口市になじんでいった平野さん。「当初は心配していた両親も、今では『山口は人もいい、食もいい』と遊びに来るたび安心して帰ります」。

ちょっとした行動力があれば 楽しさ満載の山口市の暮らし

子どもの手が離れてから学習塾を15年経営した平野さんだが、親の介護で山梨へ行く機会が増え引退。心にぽっかりと穴が開いたと感じていたとき、ケアビクスに出会った。「介護に活かせる」と始めたケアビクス*だったが、今では普及指導員として社会福祉協議会主催の講座や老人ホームなどで指導をする立場に。新たな生きがいを見つけた平野さんだが、「今でも情報収集して、いろんなイベントに参加します。ワイルドバンチフェスも行きました！」と遊びも全力。山口市での暮らしを充実させるヒントを聞くと、「山口市は探せば楽しいことがいっぱい。必要なのは少しの行動力。つまり、誰でも充実の生活が送れます」。眩しい平野さんの笑顔はすっかり「山口の人」だった。



多いときは50人規模の参加者にケアビクスを指導。「みなさんの楽しそうなお顔を見るたびに、また頑張ろうと思えます」と今では生きがいに。

*「ケアビクス」とは、いすに座ったままできる介護予防に役立つオリジナルの体操。音楽にあわせ、無理なく筋肉トレーニングができるので、老若男女問わず、楽しく安全に、心と体の健康づくりが実践できる。

先輩移住者の声

Case 4



にぎやかな都会を離れて得たものは、
バイクに陶芸に竹細工にと
趣味に打ち込める穏やかな暮らし。
挑戦のきっかけは全て“interest(関心)”。

空き家となった実家の管理・維持のため
山口市への単身Uターンを決めた小池さん。
家族と離れて暮らしながらも充実の日々を堪能する
その極意を聞きました。

小池 誠一さん(68歳)

山口市で生まれ育った小池さんは、高校卒業後に県外の海員養成学校へ進学。その後は大阪に自宅を構え、外国航路の大型船や国内フェリーの機関長などを務める。引退した現在は単身で山口市へと戻り、悠々自適な一人暮らしを満喫中。

山口市での日々を楽しむコツは
“interest”を持つこと。
見方次第で暮らしは全く別物に。



移住のきっかけは 長男としての責任感

高校までを山口市で過ごし、県外の学校へ進学した小池さんは、外国航路の大型船や国内フェリーの機関士など、いわゆる船乗りという仕事に就いた。1年のうち半分は海の上という生活の中、大阪に住居を構えていたが、山口市にある実家の存在が常に気になっていたという。「引退を迎えたとき、いよいよ実家をどうにかしないと、と思いました。長男ですから」と小池さん。山口市への移住を決めたが、まだ子育てに手がか

かる娘さんをサポートするため奥様は大阪に残ることに。小池さん単身でのUターンとなった。

田舎暮らしを輝かせる 多彩な趣味に大忙しな日々

小池さんの移住後の暮らしは、想像以上にアクティブ。「美祿市まで陶芸を習いに行ったり、バイクでツーリングしたり、竹細工に挑戦したりと、意外と忙しいですよ」と楽しそう。なるほど、ご自宅の玄関先には竹細工のプランター、玄関には愛車を描いたステンドグラス、リビングには陶器など趣味の作品がいっぱいだ。「家事もちろん自分です。料理は友人の奥さんに教えてもらうこともあります」と昔からの友達とも良好な関係だ。大阪には年に何度か帰り、その度に山口市のおいしい野菜を届ける。また、ご家族も年に数回山口市を訪れ、豊かな自然と食を堪能する。「妻も山口市が気に入っています。いずれはこちらに来る予定。それまでは一人暮らしを満喫しますよ!」。



中学校での講演に備えた資料。「いろんな職業を知って大きな夢を抱いてほしい。そして、県外や海外で働いてみずれば戻ってきてほしいですね」と小池さん。

全てのきっかけは関心から。 やりたいことを次々発見!

山口暮らしを楽しむ秘訣を聞いたところ、「とにかく“interest”を持つこと」と教えてくれた。そして、「都会は何の不自由もない。長男じゃなかったら戻らなかった。けれど実際に移住すると、『ああ、やっぱり山口市はいいなあ』って思うんですね。何より素朴なところがいい。都会ではあいさつ以上の関係はなかなか築けないけれど、山口市には温かいふれあいがある。でもなぜそれに気づけたか。それは私が常に“interest”を持って行動しているからだと思います」。今では多彩な趣味に加え、自治会長や災害ボランティアの代表なども務める小池さん。近いうちに地元の中学校で講演もするという。「船の話はもちろんですが、“interest”の大切さについても話す予定です」。それは子どもたちにも山口市の良さを見つけて欲しいと願うから。今後、さらに山口市を満喫しような小池さん。次は何に挑戦されるのか楽しみです。